

「能」の今日的意義の一考察

自然・死・速度と関連して

渡辺 直

日本大学大学院総合社会情報研究科

A Study of the Contemporary Significance of Noh

- In Relation to Nature, Death, and Speed -

WATANABE Tadashi

Nihon University, Graduate School of Social and Cultural Studies

The purpose of this paper is to consider some of the relationships between today's worldwide problems and the characteristics of Noh theater. At present, man has achieved unprecedented economic growth and technological progress; but, by contrast, this growth and progress have degraded the natural environment, made light of death, and caused an insatiable speed race. Before long, these problems might drive the earth into devastation. Noh backed by Buddhism has three marvelous characteristics to cope effectively with these problems as a smart balance for stopping the excesses and the mistaken advances into pseudo-progress that will lead us to ruin.

1. はじめに

今日、われわれは経済の繁栄とテクノロジーの発展と引換えに、誤謬に満ちた方向へ価値基準をシフトしてしまった。それは、科学技術主導の「自然破壊」、「死を軽視する風潮」、「速度偏重の体制」が示す“偽りの進歩”への前進である。20世紀は戦争の世紀であった。歴史は人々に数々の教訓を与えてきた。しかし、21世紀になっても一向に未来への展望は開けて来ない。重苦しい閉塞感が地球規模で広がっている。国際的なテロ事件、超大国による戦争、グローバル化がもたらす経済の歪、貧富の格差の拡大。こうした現状に起因する精神の荒廃。その源流である近代科学、「排除の倫理」に基く一神教の系譜、そして資本主義。それらが形成する数字と排他性そして現世偏重の刹那的世界観。科学技術の持つ思想や倫理なき世界がもたらす自然破壊。すなわち、技術はひとたび完成すると新たな欲望が起き、その欲望がまた新しい技術を生むという構図を繰り返すという性質を持つ世界であり、自然はこのようなとどまる事を知らない科学技術の対象として切り取られ

ている。その結果、人間が本来持っている詩人的世界と、倫理なき科学技術の世界の2つの世界によって引き裂かれているというのが、今日の姿である。その弊害は地球環境問題として具体的、かつ象徴的に現われている。さらに、近代科学が加速する地球的規模の速度体制。宇宙空間から光速のレーザー光線を照射する恐怖。最も速いものが全体を支配、決定する冷徹な光速時代。こうした光速の君臨が促す地政学の世界から時政学の世界への変革が招来するモラルなき今日の危機的状況。このような状況を世界遺産に選ばれた日本の「能」という視点から走査してみると、「能」の持つ今日的意味が鮮やかに浮かび上がってくる。「能」は仏教的世界観を基底に自然の中に神聖なるものを感知し、畏敬する演劇であり、観ずる者に「能」を貫く生と死の連結を伝え、死者の声に生の充実感を確認させるユニークな演劇でもある。さらに速さが尊ばれる今日にあってスローテンポな演劇であるが故の貴重な存在意義を担っていることにも着目したい。本論は「能」が持つこのような特質が今日の世界の不安と荒廃の原因である行過ぎた進歩への振り子を元に戻すバランスとしての貴重

な役割について考察しようとするものである。

2. 西洋と日本・自然への対応

北スペインに「巡礼の道」という聖地へ続くルートが東から西へ走っている。聖ヤコブ殉教の地である西端のサンチャゴ・デ・コンポステーラがその終着地である。

聖地とは聖者のゆかりの地である。聖ペテロと聖パウロの町がローマであり、イエスが活躍した聖地はパレスチナである。奇蹟、布教活動、殉教など、聖者の生涯と結びついたさまざまな事蹟が、聖地を特別な場所たらしめている。巡礼とは聖者を偲び、信仰を捧げ、病気の治癒などの現世ご利益を願う旅であり、聖地を最終目的地とするものである。

(この巡礼の道はフランス北部、中部、南部から発してフランス、スペイン国境のピレネー山脈を越え、プエンテ・ラ・レイナで一本の道となりブルゴス、レオン、アストルガ、セブレイロ峠などを経てサンチャゴ・デ・コンポステーラに至る。)(括弧内筆者) ... こうした途中の町は最終地に到着するまでの通過点であり、目的地に達するまでの手段に過ぎない。(1)

一方、これと日本の霊場と霊場巡りの場合とを対比してみると、そこには大きな違いがあることが明確に読みとれる。日本で霊場を霊場たらしめているものは、人間の事蹟であるよりは自然の姿である。霊場を巡る旅は、どこかある特定の場所を最終目的とするのではなく、自然と接するためのものである。芭蕉の『奥の細道』がそうであるように、霊場巡りも、旅そのものが目的なのである。さらに言えば『奥の細道』も一種の霊場巡りの旅であったと言えないこともない。「閑さや岩にしみ入る蝉の声」で知られる立石寺の「岩」は、昔から岩供養と呼ばれる儀式の対象であった。三輪山や那智の滝と同じように、立石寺の岩もまた神であった。(2)

仏教が日本人の宗教意識のなかに融合して生まれた「草木国土悉皆成仏」の思想は、日本古来からの自然観が、同時に宗教観であることを改めて認識させる。目の前に森を見、流れの音、鳥の声に耳を傾けながら、その背後にあって自然を支え促しているもう一つの深い世界を常に感じとってきた。そこに霊

魂のありかを意識してきたのである。

他方、「人間は神の許しのもとに自然を支配する」と理解してきたキリスト教では、「地球は人類の所有物」であり、自然より人間の方に主体があったのである。中世ヨーロッパのキリスト教神学が促してきた思想は「地球は人間の利用に供するために、人間に与えられたもの」と解し、アニミズムを粉碎し、森や水の精霊が自然のいのちを象徴していた森林地帯を次々と切り開いていった。そこにはキリスト教の伝統に潜んでいた「自然崇拜の欠如」がある。(3)

西欧に於いても、巡礼の参詣記やその他多くの旅の記録が残されている。だがそれらの紀行文のなかで、自然に関する描写は驚くほど少ない。現実世界のなかにひそむ美をはじめて発見したと言われるルネッサンス期においてさえ、それはまだ断片的なものにとどまっている。実にドイツからライン河を下ってオランダに旅したデューラーの『オランダ紀行記』のなかに、ライン河沿いの風景の美しさについて語った箇所がひとつもないことは、しばしば指摘されて来た。...後に教皇ピウス二世となるアエネオ・シルヴィオ・ピッコロミーニがアルプスの自然の美しさを語った文章を残したが、ピッコロミーニは、その後ですぐ、自然の美しさに惹かれることは神への信仰に背くことだと反省している。こういうところにも自然より人間主体の姿勢が如実に表れている。西欧が本当に自然の美しさを賛美し、崇拜するようになるのは、ロマン主義以降のことである。ロマン主義以前の時代には、アルプスの山々は悪魔の住むところと信じられていて、サン・ゴダール峠は現在でも「悪魔の橋」と呼ばれているのに対し、我が国では近づき難い山に「大菩薩峠」「毘沙門岳」「釈迦岳」などの名が与えられている。その背景には、山川草木のなかに神の存在を見る日本人の心性が働いている。霊場が日本人にとって特に重要な意味を持っているのは、この為である。(4)

3. 「能」と仏教

「能」には日本人が自然をどう捉え、内面化してきたかという日本人のファンダメンタルな精神世界が反映されている。喧騒を極める日常の空間から能

楽堂に入ると、張りつめた静寂の空間に四本の柱に支えられた重厚な屋根が目に入る。屋内にあるもう一つの屋根は、観客に非日常的感覚を出現させる。よく磨き上げられた三間四方の舞台。その舞台の奥の鏡板に古木の松が描かれている。山の神が降臨し巨木・古木に神が降りてくると信じた日本人の神意識がつくりあげた「影向の松」と言われる神の依代である。能の演目には『高砂』、『羽衣』、『松風』や『鉢木』という、松の木が登場する能も多い。例えば『高砂』には高砂と住吉の松の精だという老夫婦が登場する。自然と人間の融合が違和感なく受容されるのも日本人の精神世界に潜在する靈魂信仰に支えられていることによる。

「能」は基本的に神の降臨する、その聖なる場において演じられる芸能である。能楽堂のこうした雰囲気は現代の精神的に乾いた心に慈雨をもたらし、人々を包み癒す貴重な空間である。それは、自然の森や林の中に鎮もっている神々の放射する生命溢れる自然の息づかい、すなわち、生命エネルギーを気配として実感するからである。

「能」の底流にはシャーマニズムがあると同時に「能」の背景に仏教的世界観があることはいまさら言うまでもない。たとえば、『砧』の女は「法華読誦」の力によって成仏し、『清経』のシテは、「南無阿弥陀仏」の名号を唱えて救われる。その他、『通小町』、『藤戸』等々においても、シテの霊は弔われて救済される。地獄の苦患を見せるシテが、一転して、曲の結末で成仏を得るというパターンが「能」の一つの特徴であると言ってもよい。そうした結末が、中世の人々の欣求浄土の祈りの上に成立つものであることは疑えない。

「能」がこうした仏教的世界観に依拠しているということは、今日において想像以上に大きな意味を持っているのである。

日本の文化伝統には、一神教が説くところの“絶対”の判断基準というものはない。…これは極めて大切なことである。仏教の原初的教えである“四諦”では人間を捉えて「苦」の存在と説いている。人間は生きてる以上、常に新たな欲求を抱く。それが充足されればまた次の欲望へと「苦」すなわち、ままならないものを生産し続ける存在である。人間とい

うものはそう思うようにはいかないものであるというのが仏教の出発点である。仏教はこの世のあり方が“相対的”な原理で成立っていることを教えてくれている。(5)

一方西欧の近代の思考形態によれば、この「苦」や「悩み」はどこから来るのか、という問いに対して、その矛先は例えば中世的貴族支配とか資本主義における資本家に向けられる。自分の苦しみの原因を自分以外に求め、これを打ち負かすことで「苦」や「悩み」の解消を図ろうとする。

…こうした西欧的思考形態は近代から現代にかけての社会思想、そこから導き出される政治的方法論の分野で多くの貢献をしてきた。一部の人間だけでなく、みんなが人間らしく生活できる社会作りに大いなる力を発揮してきた。しかし、この思考形態は、常に、いかなる状況でも打ち負かすべき相手を求めることになる。それは、貴族から特権を奪おうとしたフランス革命の頃も、米ソの冷戦時代でも(また今日のパレスチナとイスラエルの果てしない報復の連鎖やイラク戦争などにあっても)同様である。

(6) (括弧内筆者)

西欧的思考は人間の本質にエゴを考える。固定した、外界から独立した“個”としての自我である。したがって自分に関わる不都合は外側に原因を求める形となり易い。エゴ自体の欠点、つまり自分が悪いといった人間的な反省の発想が西欧にはなかったわけではないが、これとても、創造主である神に対する人類全体が負っている罪、“原罪”という形で抽象的な“絶対”の領分に押し込められてしまった。

一神教的“絶対”を支えとする思考パターンではパレスチナ対イスラエルの例を見るまでもなく、対立や争いに終止符が打たれることは期待し難い。現実世界が相対的メカニズムによって成立っていることを教えてくれる仏教の哲学は今日、極めて注目すべき特質なのである。

4. 神の「道具」と「容器」

マックス・ウェーバーは、ヨーロッパとアジアの宗教の根本的な相違を次のように捉えている。

ヨーロッパのユダヤ教的=キリスト教的伝統は、

神を人間から隔絶したものと捉え、人間が神の域に近づくことを厳しく退けた。人間はひたすら神の栄光を顕すために地上に遣わされた「神の道具」であるというのが、ヨーロッパの宗教の人間解釈であった。これに対し、アジアの宗教の基本的な特徴は、人間を「神の容器」と見なすところにある。人間は、修行を重ね禁欲を守るならば、この世において悟りを開くことができ、絶対者の域に近づくことができる。いいかえれば、人間は、自らのうちに神の性格を受け入れることができる「神の容器」であるというのが、ウェーバーの考えるアジアの宗教の基本的特徴である。…ヨーロッパのプロテスタント（特にカルヴァン派）では、人間は「神の道具」であるとの観念とその独自の職業観念が結びつき、この世で神の栄光を顕すために職業に就いて禁欲的に働く敬虔な人々を生み出した。この敬虔なプロテスタント信徒こそが、呪術を排斥しつつ、初期の合理的な近代資本主義の担い手となったのである。…一方、アジアの宗教にあっては、いわばエリートたちは、「神の容器」としての修行を積んで悟りを開くことができたが、それ以外の大衆は、精神的な空白状態のなかに放置されたままであった。(7) 日本においても同様の現象が生じていた。

仏教の日本伝来以後、約七百年の歴史のなかで、インドの仏教は日本化し、日本人の生活の中に浸透していった。しかし、奈良仏教にみられる、「情け無用」ともいえるほどの「救いにおける悪人切り捨て」や、平安仏教の「悪人でも救われる、まして善人をや」にみられる善人正機（善人優先）的救いでは、一般民衆の生活のなかにまで古代仏教が浸透することは難しかった。奈良仏教や平安仏教の説く「悪人切り捨て」や「善人優先」では救い切れないほどの煩惱、つまり悩みを背負った人々（仏教でいう悪人）は、仏教の救いに大きな不安を抱いたのである。…古代仏教が要求する往生のための宗教的条件は、ブ口の僧侶にも堪えがたいような難行苦行、すなわち造像起塔・知恵高才・持戒持律などの諸行を实践することであった。このような条件を身につけることは、僧・俗を問わず生身の人間にとっては、まったく高嶺の花に等しかった。なぜならば、悩み、煩惱は欲から生まれるものであり、人間は命のあるかぎり、

どのような修行をしたところで、欲と煩惱からの絶縁は不可能な生き物だからである。…鎌倉仏教は古代仏教が救いの条件に求めた造像起塔・多聞多見・持戒持律などの諸行をすべて否定している。それだけでなく、古代仏教が往生・成仏のための不可欠条件とした修行や学問を否定し、信心だけで救われることを強調している。…親鸞にいたって古代仏教の救いの条件である「善人」であることは全面的に否定され、往生（救い）のためには、善人であるということはむしろ後回しになる、という悪人優先の救いが誕生したのである。…ひたすら「南無阿彌陀佛」を唱えれば戦乱と飢餓からの不安と苦しみから解放され、西方の極楽浄土への往生が約束されるという浄土教の教え。その念仏に光なき現実に絶望した民衆が帰依したことは極めて自然のことといえる。(8)

今日の世界も形こそ違うが、国際的なテロの脅威、超大国による戦争、グローバル化がもたらす政治、経済、社会の歪と犯罪の急増による社会不安がいたるところを覆っている。テクノロジーの急速な進歩とそれがもたらす世界の急速な変化に翻弄される人々が何かに救いを求めているという構図はまさに法然、親鸞の時代と同じである。

5．見えざる国教

仏教世界との比較と6章への導入のため、キリスト教と速度体制が動かしている今日の超大国アメリカを考察してみよう。近年の「グローバリゼーション」という言葉が表す構図を見るならば「アメリカ対世界」と同義といえよう。更にその中心には理想的キリスト教共同体の理念としての「ピューリタニズムの世界観」がある。ジョージ・ケナンは『アメリカ外交50年』で20世紀アメリカ外交の特質についてこう指摘している。

外国政府に勧めて、崇高な道徳的、法律的原則の宣言に署名させることによって、われわれの外交政策上の目的を達成しようとする傾向は、アメリカ外交のやり方に強力かつ永続的な力を及ぼしているように思われる。…国内社会における法律的観念を国際社会に移植しようとするアメリカの顕著な傾向とも関連していることは疑いない。(9)

すなわち、悪に染まった邪悪な世界に対してアメリカは挑戦し、新しい善の世界を作るのだという善悪二元論と他国の政府と国民を自国と同じ基準で動かそうとするアメリカ的価値観の表出がある。

アメリカは「民族国家」ではない。民族性とは「過去と結びついた生存感覚」である。国民に共有される「過去」は国家権力によって意図的に作り出されることもあるが、長い時間が自然に作り出してくれるものでもある。自然に作り出されてきた「過去」については、国民にも意識されない場合が多い。「日本人としての民族性とは何か」、「日本とは何か」ということを、日本人は日常的に意識することは少ない。また、その必要性もない。あえて、それを説明しようとするとうんざりを感じる。しかし、日本人としての同一性は、なんとなく感じることができる。

...それではアメリカの場合はどうか。アメリカには「なんとなく感じることのできる同一性」など存在しない。民族的アイデンティティの基礎となる「共通の過去」は、アメリカには存在しない。「共通の過去」を持たないアメリカは「共通の未来」についての意志を共有することによって、辛うじて国家として統合されてきた。(10)

また、アメリカの共通項の中心的存在として、カトリック、プロテスタント、ユダヤ教、ギリシャ正教、それにモルモン教という人口の 88 パーセントを占める、聖書を正典とする宗教の信徒が挙げられる。「共通の過去」を持たない多民族国家アメリカにとって、これは国家統一のための、かけがえのない共通項である。キリスト教はアメリカの根本を支える見えざる国教である。それは他の宗教と同様、その社会や国家を正当化し、大義を与える。メキシコ戦争におけるアメリカの大義「西半球（南北アメリカ大陸）を支配するのは、神からアメリカに与えられた『明白な運命』である」というものであった。また、19 世紀末の米西戦争におけるアメリカの大義は「共和制とキリスト教に代表されるアングロサクソン文明を世界に伝えるため」であった。世界をキリスト教化するという海外伝道と、世界をアメリカ文明化するという世界戦略は表裏一体のものであった。(11)

今日の「グローバル化」とはアメリカ文明による

世界の同化であり、アメリカ化にほかならない。グローバル化を進める背後にはこのような新しい善を世界に移植しようとする意志とそれを支えている強大な産業と軍事力が存在し、アメリカの国益追求のためにその超大国としてのスーパー・パワーを行使している。さらにそれを推進しているのが《ドロモロジー（速度体制）》に他ならない。

6．光速の君臨・眺望の崩壊

1903 年にライト兄弟がキティホークで動力飛行に成功して以来、航空機のスピード記録の更新は今なおとどまるところを知らない。また、大砲の弾道計算から開発されたコンピューターは今日では全世界を覆い尽くし、なおその速度を加えている。

こうした傾向に拍車を加える現代の「速度体制」についてフランスの都市計画家ポール・ヴィリリオは次のように論評している。

現在の速度は通信技術ネットワークによって絶対速度、光速という限界点に達しあらゆる時間が「リアルタイム」と化し、ローカルなリズムはなくなり生活に深くかかわるテンポやリズムや速度が、地球規模で均質化をしいられ、人間的内面に大きな影響を与えている。絶対速度は、たとえば人間に反射を要求し、反省という時間のかかる作業を行う能力を削減してしまう。(12)

われわれは、9・11 事件も、イラク戦争も瞬時にしてテレビのなかで、携帯電話のなかで、PC のなかで見ることができた。家にいながら、歩きながら、デスクの上で、乗り物のなかで、そして至る所で世界の出来事は光速で地球全体にあまねく即時に、均質に配信される。

かつて鉄道と航空機の発明を通じて達成された距離の短縮は、「空間の否定」を意味するだけではなく、ミサイルや人工衛星を通じた情報通信網を生み出した軍事技術の飛躍的發展によって「時間の消滅」という段階にまで到達しつつある。(13)

時空間の変容は、以下の三つの歴史的段階を経て進行してきた。第一は、空間が絶対的な意味を持っていた前工業期である空間の時代。第二は、近代以降、馬車や帆船に始まり、後に鉄道や航空機といっ

た大量輸送手段の発明によって、領土・領域に対する交通手段の再組織化が急速に進行した空間・時間の時代。そして第三に、核兵器を中心にする軍事技術に加え、テレビと情報通信網を通じて実現した空間・速度の時代である。(14)

メディア技術の発達は、人々の眼差しを、地球上のあらゆる場所へ瞬時に移動することを可能にした。それは、グローバル化する速度体制が作り出したヴァーチャルな世界時間（リアルタイム）によって、時空間の支配が完了したことを意味している。なぜなら、そこでは、時空間はもはや相対的な意味しか持ち得ず、距離のリアリティは消滅しているからである。(15)

このように通信技術ネットワークが移動や伝達の所要時間を限りなくゼロに近く短縮し、地理的距離を極度に縮小し、地平線の向こう側をも見せる光学器械によって、かつては視界の外にあったものも容易に視界に収まるようになった。現代の軍事力はこのような光速レベルの技術を駆使して維持され、展開されていることは周知の事実である。

能『隅田川』の母はかどわかされたわが子を尋ねて都より東国の隅田河畔に辿り着く。そこには都より隅田川に至る遥かなる空間的距離感がある。

また、『伊勢物語』で業平一行が武蔵の国と下総の間に流れる「いと大きな河」隅田川を前にして、思わずに立ちすくんでしまったという、都を遠く遥かに隔てる恐いほどの空間的距離感とそれが醸し出す寂寞とした孤独感。このような人間の詩人的側面を顕現させた空間は、今日の高速移動体をもたらす「速度体制の革命」によって、その地理空間の存在を急速に失い、人間の詩人的側面も消滅の寸前にある。やがてリニア・モーターカーや形状的に限りなく飛行物体に近づく超高速移動体によってかつての都と江戸の間の所要時間は時単位から分単位へと短縮され、「時間と空間の消滅」へという段階へ到達することは明白である。走行から生じる騒音や衝撃波から環境を守るための高い壁面の連続（或は完全な真空状態の円筒状の中を走行）と、あまりの高速（またはトンネル）で風景を楽しむことはおろか、見ることもすらできない。そこには出発地と到着地という2点間をいかに早く輸送するかという単なるモノの

移動という仕掛けと、“眺望の崩壊”があるだけである。人間は貨車に積まれた被輸送物と化するのである。そこには旅愁もなければ、情緒もない。科学技術は人間に便利さをもたらす。しかし同時に負の側面で人間のもつ詩人的側面、倫理観などを奪ってゆく。技術の初期段階では小さくローカルなものであったが、技術の高度化に伴いその奪取は根源的なところにまで達する可能性を持っている。

急速な移動が原因で発症するキネトシス（加速度病）と呼ばれる病気がある。これはわれわれを一時的に運動障害にし、窃視症の旅行者（運動能力を失い、ただ、視線のみ機能する）とするが、...もうすぐ、マルチメディアのネットワーク中毒患者、ネット・ジャンキー、ウェブ狂、IAD（インターネット中毒症）にかかったサイバーパンクなどが出現するだろう...一方、幼稚園の時からテレビにくぎづけだった子供たちは、すでに脳の機能障害が原因で過剰動作症にかかっている。これは支離滅裂な行動や重症な注意力散漫、コントロールがきかない突発的・発作的動作の原因になる。(16)

7. 「能」の特質と平衡力

現代の世界が直面している三つの問題点、「自然と人間」、「死」、「速度体制」について「能」の持つ特質とその平衡力の視点から考察してみよう。

（1）「自然と人間」について

西欧において、中世キリスト教世界の自然観ではかつての神・人間・自然は一体であるとする「パンピュシズム」が破れ、代わって神 人間 自然という截然たる階層的秩序が現われてきたのである。ここでは人間も自然も神によって創造されたものであり、神はこれらのものからまったく超越している。人間も自然と同格ではなく、むしろ自然の上であってこれを支配し利用する権利を神からさずかったものとなる。近代西欧の自然観は本質的にはこの中世キリスト教世界に含まれていた自然を継承しつつ、これを方法的に自覚発展させたものといえる。すなわち自然を人間とは独立無縁な対立者として、こ

れを客観化し、このまったくの他者に、外からさまざまな操作を加え、分析し利用しようとするものである。(17) 〔2.西欧と日本・自然への対応〕で述べた「自然崇拜の欠如」の源流がここにある。

一方、「能」の世界ではどうであろうか。「能」では人間は自然と同根である、という考え方に立っている。能『高砂』、『松風』などにみるように人間が松の精となり、松の精が人間となるというアニミズム的思想を内蔵する「能」は 21 世紀の自然と環境保全のために極めて重要な精神的文化の一端を担う演劇である。

自然を常に内面化させながら受け止めてきた日本人にとって自然観は同時に宗教観であり、生命観であった。仏教的世界観を背景とする「能」は、この生命認識に立ち、一神教世界も、多神教世界も広く包み込むことのできる世界的演劇である。

西欧の人間中心主義的な自然観に危機感を抱いたニューサイエンスの論者たちは機械論的自然観をはじめとする近代合理主義的自然観を排し、東洋の思想や信仰の中に見出した霊的な経験や理解を、近代科学では把握することのできない「物の隠された次元」すなわち深層を捉えたものとし、これらをホリスティック（全体論的）な視点と呼び自然把握への道を開く手掛かりとした。(18) この道は「能」に代表される日本人の精神世界がつくった道に符合する。自然・宇宙といったものを内面化しうる精神構造の柔軟性と内外一如の自然観、生命観こそ二元対立を離れて共生を願う世界観を生むものである。「能」の持つアニミズムに根ざした神の認識は自然と環境保護の原点として高く評価されるべきものである。

（２）「死」について

次に「能」の第二の特質として死霊の世界がある。今日の社会では「死」というものに真正面から向かい合う機会は稀である。病気になれば病院に隔離され、万一の場合には葬儀社へとバトンタッチされ、決められた手続きによって総ては済まされる。死は医学という科学的合理主義の下に管理されており、昔のように、家族に囲まれて「死」を迎えるという光景は殆どなくなった。「死」の瞬間に立ち会うこと

も少なくなってきた。

仕事に奔走し、時間に追われる現代人にとって死はバーチャル・リアリティーでしかなく、実感が湧かない現象である。それが今日の生命軽視の風潮を生んでいる一因ともなっているのである。このように生から死に至る人間の自然な営みの最後を、機械的に処理するという反自然的な現代の状況は、死者が発信する「死の重み」、「死の厳粛さ」を同世代は勿論、次世代にも体験させることなく葬むり去る結果となっている。

死者の世界とこの世とを、融通無碍に往き来し、見る者に死者の眼を与え、死者の声を聞かせ、死者に会うことのできる特異なる演劇「能」、まさに「能」こそ現代医学が不毛にしている「死」の空白に自然的側面を吹き込み、人々に生の充実感を確認させる貴重な演劇なのである。

多田富雄は「能」に登場してくる死者について次のように述べている。

能に描かれた死者の世界は、日帰り可能な至近距離にあった。生は死に連結しており、死は生の延長上にあった。死者は、祭りや行事には隣人に交じって幽霊や化身となって姿を現し、生者と声を交わし存在を主張する。カミや成仏した死者はその喜びを伝えようとし、非業の死をとげた者は恨みを述べ、執心を残した者は自分の生の意味を問いかけ慰めを願う。生者はその声を間近に聞き、自分の一生を投影することによって生の充実を確認した。能が当時の庶民に広く受け入れられ今日まで生き延びてきた理由のひとつは、まさしく死者の声を聞くというユニークな技法をドラマツルギーの核として取り入れたからではないだろうか。(19)

生きている者には全体は見えない。われわれはある仮の時点で、不確実な予想をもとに物を理解しているにすぎないのだ。しかし、死者の眼を持てば、すべてが終わったところで、全体を見渡すことができる。その眼で見た世界は不完全な生者のそれとは違う。観客は死者の眼で眺めた全体の世界を追体験し、死者が語りかける真実の声を聞くことができるのだ。現代においても、私たちは死者の声を聞くために能楽堂に足を運ぶ。すべてを見た死者の眼は、現代人には見えなくなった世界を見せてくれるかも

しれないからである。(20)

人間として自然な「死」を迎えることが難しい現代の社会状況は、死者を主要な登場人物とする「能」の重要度をますます高めるであろう。

(3)「遅いテンポ」

「能」の第三の特質としてその「遅いテンポ」があげられる。今日、速度というものが多忙という世界へ、眺望の崩壊へ、核兵器や生物兵器の瞬間的到達の恐怖時代へと人々を追いつめている。ポール・ヴィリリオはその著『ネガティブ・ホライズン』で速度の時代について次のように指摘している。

速度は富の隠された一面であり気づかれることのない階級制度の起源でもあるだけでなく、発見されるべきひとつの未知の環境を形成している。大地や海や空を征服することによって人間は岩石圏、水圏、大気圏といったさまざまな環境をコントロールできるようになったが、この三つの圏について今日、走行圏（ドロモスフェール）つまり速度の空間が出現した。それは運動量以外の基準をもたない環境である。相対性理論は光速を超えることができない宇宙的地平線として定立した。だから走行圏というあたらしい環境を考えることが必要になったのである。(21)

「速度体制」はグローバリゼーションを支え、超大国アメリカの政治、経済、軍事などを支えている。アメリカ大統領の演説はそれが発せられたと同時に人里離れた地球の裏側にある小屋のテレビで見ることができる。艦艇から発射されるミサイルもライブの映像で瞬時にして見ることができる。これは極めて危険に満ちた意味をもっている。

今日の「速度体制の革命」によって地理空間の存在がミニマムになり、時間認識がマキシマムへと拡大した時代にあっては、例えば“核戦争”において雌雄を決するのは地理的な距離関係ではなく、いかに人間が的確な判断を下せるかという点にかかってくる。しかし、緊急時、即座に人間が常に的確な判断を下せるかは疑問である。

光速で、あるいは光速をめざして恒常的に世界が疾走している現状に対して、「能」のスローテンポは際立っている。今日のように速度が支配する時代、

「速いということが善」で、「遅いということは悪」という対極性がより鮮明となる中で、逆説的であるが、この「能」の「遅いテンポ」は救いである。光速の中でわれわれの心身は引き裂かれ振り回される。

映画『モダン・タイムス』のチャップリンのようにコンベヤーで次々とスピーディーに流れてくるナットをプライヤーで締める動作を延々と繰り返す「速度の奴隷」と化す時代に、「能」のスローテンポは人々に人間のあるべき姿の座標を提示している。「速度体制」の進展、拡大強化に比例して、この「能」の遅さが故の心身への癒し効果の魅力は、ますます高まってゆくであろう。そこには生身の心身が潜在的に希求する人間的等身大の速度への回帰がもたらす安堵感があるからである。

8.まとめ

現代が直面している「自然と向き合う姿勢」、「バーチャル・リアリティとしての死」、そして「光速に近づく速度体制」から生ずる弊害について論じ、これらに対応する仏教的世界観を背景とした「能」の特質である「自然と人間との融合」、「生と死の連結」、「遅いテンポ」について考察してきた。このことから、「能」が今日の倫理なきテクノロジー主導による数々の弊害の過度な進行に警告を発し、制動装置としての、又、平衡を保持するための貴重なバランスとしての機能と役割とを内蔵する極めて今日的な演劇であることの重要性を再認識したい。

(注)

- (1) 高階秀爾『西洋の眼 日本の眼』青土社、2001年 pp.25-26
- (2) 同上 p.26
- (3) 久保田展弘『日本多神教の風土』PHP 研究所、1997年、p.141
- (4) 高階秀爾『西洋の眼 日本の眼』青土社、2001年、pp.26-27
- (5) 久保田継成『これからの日本人と仏教』角川書店、1984年、pp.14-15

- (6) 同上 pp.16-18
- (7) 野田宣雄「浄土真宗のアジア回帰」『大航海』8月号、新書館、1999年、p.55
- (8) 速水侑『浄土信仰論』(古代史選書3)雄山閣出版、1978年、pp.25-26
- (9) ジョージ・ケナン 近藤晋一ほか訳『アメリカ外交50年』岩波書店、1991年、p.74
- (10) 森孝一「アメリカの大義」『大航海』8月号、新書館、1999年、p.108
- (11) 同上 p.112
- (12) 太田省吾「能 遅さ の受容」『能と狂言』創刊号、能楽学会、2003年、p.25
- (13) 南山淳「速度体制としての国際政治」『現代思想』1月号、青土社、2002年、p.148
- (14) 同上 pp.148-149
- (15) 同上 p.149
- (16) ポール・ヴィリリオ 丸岡高弘訳『情報化爆弾』産業図書、1999年、p.50)
- (17) 伊東俊太郎『比較文明』東京大学出版会、1985年、p.141
- (18) 高木仁三郎『いま自然をどうみるか』白水社、1998年、p.147
- (19) 多田富雄『脳の中の能舞台』新潮社、2001年、p.43
- (20) 同上 pp.43-44
- (21) ポール・ヴィリリオ 丸岡高弘訳『ネガティブ・ホライズン』産業図書、2003年、表紙カバー裏面

【参考文献】

赤坂憲雄『境界の発生』砂小屋書房、1989年
 伊東俊太郎『比較文明』東京大学出版会、1985年
 太田省吾「能 遅さ の受容」『能と狂言』創刊号、能楽学会、2003年
 久保田継成『これからの日本人と仏教』角川書店、1984年
 久保田展弘『日本多神教の風土』PHP研究所、1997年
 河野博臣『生と死の心理』創元社、1991年
 里井睦郎『謡曲文学』河原書店、1976年

ジョージ・ケナン 近藤晋一ほか訳『アメリカ外交50年』岩波書店、1991年
 高階秀爾『西洋の眼 日本の眼』青土社、2001年
 高木仁三郎『いま自然をどうみるか』白水社、1998年
 武田鏡村『仏教』新曜社、1987年
 多田富雄『脳の中の能舞台』新潮社、2001年
 立花隆『宇宙からの帰還』中央公論社、1983年
 鳥居明雄『贖罪の中世』ペリかん社、1999年
 野田宣雄「浄土真宗のアジア回帰」『大航海』8月号、新書館、1999年
 速水侑『浄土信仰論』(古代史選書3)雄山閣出版、1978年
 ポール・ヴィリリオ 石井直志・千葉文夫訳『戦争と映画』平凡社、1999年
 ポール・ヴィリリオ 河村一郎訳『幻滅への戦略』青土社、2000年
 ポール・ヴィリリオ 土屋進訳『瞬間の君臨』新評論、2003年
 ポール・ヴィリリオ 土屋進訳『情報エネルギー化社会』新評論、2002年
 ポール・ヴィリリオ 本間邦雄訳『電脳世界』産業図書、1998年
 ポール・ヴィリリオ 丸岡高弘訳『情報化爆弾』産業図書、1999年
 ポール・ヴィリリオ 丸岡高弘訳『ネガティブ・ホライズン』産業図書、2003年
 港千尋『第三の眼』廣済堂出版、2001年
 三野正洋・深川孝行『データベース戦争の研究』光人社、1999年
 森孝一「アメリカの大義」『大航海』8月号、新書館、1999年
 柳宗悦『南無阿弥陀仏』岩波書店、1986年